

グローバル社会における 異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える

池田理知子・塙 幸枝 編著

青沼 智・宮崎 新・神戸直樹・石黒武人・鳥越千絵・師岡淳也・河合優子 著

Intercultural Communication
in a Globalized World

SANSHUSHA

グローバル社会における 異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える

池田理知子・埴 幸枝 編著

青沼 号・宮崎 新・神戸直樹・石黒武人・鳥越千絵・師岡淳也・河合優子 著

Intercultural Communication
in a Globalized World

SAINSHUJSHA

はじめに

いまではあらゆるところで使われている「グローバル化」ということばですが、その意味を問われると、「多様な人たちとの交流」といった漠然としたイメージを思い描く人が多いのではないのでしょうか。国境をはじめとした「境界線」を越えて広がるグローバルなつながりがあるからこそ、私たちの暮らしが成り立っているのはまぎれもない事実です。ところがそのつながりがつくり出した現象のなかには、たとえば格差社会や環境汚染、移民の増加といった複雑な問題も含まれます。こうした問題を掘り下げて考えていくと、多様な人たちと私たちとの入り組んだ力関係がみえてくるはずですが、そこでのかかわりには、「交流」というどこかポジティブな響きをもつことばでは言い表せない現実があるのではないのでしょうか。

では、「多様な人」の中身はどうなっているのでしょうか。国籍を基準としたアメリカ人や中国人、ブラジル人などをその例としてあげる人は、少なくないでしょう。それも多様な社会を構成する一つの要素ではありますが、そこに貧富やジェンダー、性的指向、障害のある／なしといった違いや、移民や難民であるといった状況などを加味して、具体的なかかわりあいが生まれる現場を眺めると、異なる様相が浮かんできます。

これまでとは違った視点でまわりを見わたすと、意外と身近なところに自分とは異なる文化背景をもつ人たちがいるのに気づくはずですが、自分と変わらない日常を送っていると思っていた隣人がそうではなかったと気づく、つまり自らの「あたりまえ」がそうではなかったと知ると、これまで平気で他者を傷つけていた自分が見えてくるかもしれません。あるいは、社会で通用している「あたりまえ」に傷つけられた自分を通して、その理不尽さがまかり通る社会をどう変えていけるのかを考えはじめるともかもしれません。「異文化コミュニケーション」の学びは、「あたりまえ」を疑うところから始まるといっても過言ではないでしょう。

本書では、グローバル社会のなかでこれまでみすごされてきた、身近な

「異」を取りあげ、差異が生み出すさまざまな関係性がどのようなものを明らかにします。そこに生じる不均衡な力関係の維持に加担したままでいるのか、それとも変えていこうとするのか、コミュニケーションの〈想像／創造する力〉が試されているといえるでしょう。

本書は、3部構成となっています。

まず、「異文化コミュニケーション」を学ぶうえでの基礎的な概念がわかりやすく説明されているのが、第Ⅰ部「基礎編」です。読み進めていくと、「文化」「アイデンティティ」「コミュニケーション」「言語」「非言語」「メディア」「グローバル化」についての理解が深まるようつくりになっています。同時に、さまざまな現象を批判的に分析するための多数の提言が記されています。

第Ⅱ部「応用編」は、基礎的な概念を応用して、コミュニケーションのさまざまな現場の分析・考察を行った四つの章で構成されています。「コミュニケーション」がどのような力もちうるかについて、公害資料館と公害マンガというメディアを通した異文化体験から考えていくのが、第6章です。第7章では、〈外国語＝英語〉という言語選択や、ネイティブを頂点とした英語話者のヒエラルキーといった思い込みを問いなおし、異文化実践として語学を学ぶ重要性についてみていきます。第8章では、「日本」や「日本文化」について話を求められる異文化交流の場で、私たちは何を語ればよいのかについて考えてみます。第9章では、さまざまな文化背景をもつ人たちが交差する企業内の「多国籍チーム」を分析の対象として取りあげ、「コミュニケーション」と「アイデンティティ」の課題を探っていきます。

時間軸と空間軸をもう少し広げて、「異文化コミュニケーション」について考えるための四つの章が収められているのが、第Ⅲ部「発展編」です。まず第10章では、1950年代にまでさかのぼって、「日本人」というイメージがスポーツ観戦を通していかにつくられたのかをみていきます。そして次の第11章では、ドイツにおける移民・難民問題から、多文化社会の課題を探ってみます。日本でもそう遠くない将来、同様の問題が起こりうるということがそこでは示唆されています。明治時代の演説から始まり、現在の「スピーチ」や「プ

レゼン』へといたる歴史の変遷から、公の場において文化や政治を語る行為の意味を探っていくのが第12章です。第13章では、私たちのまわりにある、みえる みえない「境界線」について考えます。国境や人種、民族といったみえる「境界線」だけでなく、みえにくくなっている「境界線」を意識的にみていくこと、そして越境・架橋することの意義について学んでいきます。

本書を読み進めていくと、複雑化するグローバル社会のなかで、複眼的に現象を捉えることの重要性が実感できるのではないのでしょうか。

各章は、写真やイラストと、身近な出来事や社会的な事象を載せたページから始まります。そこでは、みなさんに考えてほしい課題を提示しています。また、その章の内容を理解するためのキーワードもあげておきました。本文中には、そこで論じられている主題や概念について参照すべき章やページが、随所に挿入されています。関連する章と有機的につなげて考えられれば、異文化コミュニケーションに対する理解がさらに深まっていくはずです。

章末の「It's your turn. ディスカッションのために」では、質問およびディスカッションのテーマというかたちで、各章の内容を理解するための重要なポイントをあげました。「Let's try. さらに考えるために」は、各章のテーマについてより深く学びたい人に向けて書かれたものです。そこでは参考図書もあげていますので、興味を覚えた人はぜひ手にとって、その章の理解をさらに深めてください。また、「参考文献」として、本文中で引用されている文献を一覧にして並べました（日本語は50音順、英語はアルファベット順）。それらの本や論文も、より広い学問の世界へと導いてくれるはずです。

最後になりましたが、三修社編集部の松居奈都さんにお礼を申し上げます。松居さんのおかげで、限られた時間のなかで本書が充実した内容となったのは間違いありません。本当にありがとうございました。

編者を代表して
池田理知子

CONTENTS

第 I 部 基礎編

- 第 1 章 他者との出あい
「異なる」という意味 12
1. 〈国=文化〉という枠組み 13
 2. さまざまな文化の違い 14
 3. ステレオタイプな表象 15
 4. 日常のなかのカルチャーショック 16
 5. 他者との出あいとアイデンティティ 18
 6. 異文化コミュニケーションを学ぶ意義 20
- 第 2 章 「ふさわしさ」をめぐるコミュニケーション
読めない空気 24
1. コミュニケーションの意味 25
 2. 「ふさわしさ」の恣意性 26
 3. 暗黙の了解 28
 4. 協調性と排他性 29
 5. 高コンテキスト文化／低コンテキスト文化 30
 6. 「わかりあい」が隠蔽するもの 31
- 第 3 章 ことばというシンボル
メディア化する日常 36
1. 多義的なことば 37
 2. ことばの道具性 38
 3. 始めにコミュニケーションありき 40
 4. ことば・権力・支配 41
 5. ネット時代のことば 43
- 第 4 章 ことばにできないメッセージ
沈黙の意味 48
1. 沈黙のイメージ 49

2. 多種多様な非言語コミュニケーション 50
3. 非言語メッセージの意味解釈 51
4. 「話さない」と「話せない」 53
5. 言語／非言語の優劣関係 54
6. 多様な解釈の可能性 56

第5章 グローバル化とメディア 情報化社会と私たち 60

1. 世界をかけめぐる情報と生活のベース 61
2. ネット社会の不平等な関係性 62
3. 個人情報のデータベース化 63
4. グローバル化と経済格差 65
5. メディアと私たちの意識 67
6. 私たちと社会とのつながり 68

第II部 応用編

第6章 コミュニケーションの〈想像・創造する力〉 記憶の継承 74

1. メモリアルデーが作り出す記憶 75
2. 「大きな物語」からこぼれるもの 76
3. 「他者」と出あう場としてのメディア 78
4. コミュニケーションの射程 81
5. 自分のなかの「異」との出あい 82

第7章 英語という言語選択 外国語を学ぶ意味 86

1. 英語を学ぶなかでの違和感 87
2. 外国語は英語 87
3. 英語“で”コミュニケーション 89
4. 英語を学ぶわたし 91
5. 「異文化実践」としての外国語学習 94